１７０９０２（於横浜市中央図書館）

ヨコハマライブラリースクール

第３回「吉田新田の開発と近代都市横浜の形成」

（横浜開港資料館）斉藤　司

１　横浜開港の地域史的要因

近代都市横浜の直接的な起点は安政六年（一八五九）の横浜開港になります。横浜が開港場として選択された要因は国際・国内関係を含めさまざまな理由が考えられますが、江戸周辺に位置し当時の主要幹線である東海道からやや離れた地点に位置するという横浜の地域性と地理的な条件をふまえると、少なくとも次のような三点が地域史的視点からの前提として想定されます。

第一点は、開港場そのものの建設が可能であったことです。一七世紀前半、現在の大岡川・中村川・JR根岸線に囲まれた地域全体と関内の南側半分は陸地ではなく、現在の元町付近から北へと伸びる砂州によって東京湾と隔てられた入海でした。この入海が吉田新田・横浜新田・太田屋新田という一連の新田開発によって陸地（干拓）化されたことが、横浜開港とその後における都市域の拡大を可能にしています。

第二点は、開港場と江戸とを結ぶ陸路が設定可能であったことです。横浜港の立地と繁栄は、政治的中心地である江戸（東京）との関係を前提にしており、江戸（東京）と横浜を結ぶ陸路の存在は必須のものでした。開港当初においてこの役割を担ったのが東海道から分岐する横浜道です。横浜道は、芝生村の浅間神社下付近で東海道と分かれ、新田間川・帷子川・石崎川を越え戸部村へいたり、野毛の切通し・吉田橋を経て開港場にいたります。横浜道が三本の川を越える地点は、現在の相鉄線天王町駅付近まで入り込んでいた帷子川河口部の入江であり、一八世紀後半以降におけるこの入江を対象とした新田開発の進展が横浜道の開設の前提となります。

第三点は、横浜開港にあたり開港場を直接支える一定の経済圏が存在していたことです。当初、開港場として想定されていた神奈川の地は、東海道の神奈川宿であるとともに、東京湾西岸の有力な湊であった神奈川湊の所在地でした。廻船の停泊地は台町の下、現在の横浜駅付近であり、神奈川湊で揚げ降ろしされる物資は、神奈川宿・芝生村・保土ヶ谷宿から広がる陸路と鶴見川・帷子川という河川による水路を通じて内陸部の村々、さらには八王子との間で交易が行われていました。神奈川湊に沿った神奈川湊ベルト地帯ともいうべき神奈川宿（神奈川町と青木町の二か町）・芝生村・保土ヶ谷宿（保土ヶ谷町・神戸町・帷子町・岩間町の四か町）の人口は合計一万人弱であり、五・六万～一〇万人弱と想定される当時の市域の中でも最大の人口密集地帯を形成していた。

２　吉田新田とは？

江戸の材木・石材商である吉田勘兵衛（1611～1686）が大岡川河口部の入海に開発した新田。明暦２年（1656）７月に第１回目の工事に着手するも、翌明暦３年（1657）５月の大雨により堤防が崩壊して失敗。万治２年（1659）２月より第２回目の工事開始。寛文７年（1667）に「完成」、寛文９年（1669）に吉田新田と命名される。現在の JR 根岸線・大岡川・中村川に囲まれた釣鐘型の形状。

３　新田開発の前提

①17 世紀における人口の増加→新田開発の必要性

・1600 年－1200 万人～1800 万人→享保６（1721 年）－3000 万人

②17 世紀前半の新田開発－村落の周辺・近隣の開発可能地（放棄された旧耕地を含む）を村単位・家単位で開発

→おおむね半世紀で開発可能地が開発され尽くしてしまう状況

③17 世紀後半の新田開発－自然環境を変貌させるような大規模の開発

・具体的には湖沼・海面を対象とした開発→膨大な資金と技術の必要性

→吉田新田・泥亀新田はこの段階のもの

④18 世紀後半の新田開発

４　吉田新田の開発

（１）「埋立」ではなく「干拓」である

→堤防で新田の範囲を囲い、その中を干上がらせる

吉田勘兵衛の商売である材木・石材は土木工事の材料、なおかつその運送は海上交通を利用している。

・水田稲作における用水の取得と悪水の排出処理

・横浜開港後の都市化における「埋立」作業→土砂の供給源として運河開削

（２）２枚の絵図－「開発前図」と「開発図」

・「開発前図」の入海部分に「開発図」を乗せる形式

→２枚はセットの設計図・完成予想図

（３）「開発前図」を読む

①「入海」の文字の上・下における船の有無→海底の浅深の表現

→長年にわたる大岡川からの土砂の堆積による

・上部は浅く開発の適地。下部は深い。

②右下における「神奈川町」の描写

・新田開発地を明示するランドマークとしての東海道神奈川宿

（４）「開発図」を読む

①左右＝南北方向に６本の道→海側から「一つ目」～「七つ目」

②用水の幹線としての中川→中川を基準に「北」・「南」

③悪水の一時滞留場としての一つ目沼

（５）開発の工程

①築堤による新田地の囲い込み→海面を干上がらせる

②道路・用水路と耕地の地割

③耕作の開始→肥料の投下などによる生産性の上昇と安定

・5 年間程の年貢免除期間

④耕地所持者の確定＝検地→新田の「完成」

（６）開発資金の調達

①「金本」（＝吉田勘兵衛）＋「惣中間」＝「新田御中間衆中」による共同事業体
支出金額の割合は、「金本」（＝吉田勘兵衛）が５０％、「惣中間」全体で５０％、
「惣中間」は５口（５株）から構成、１口あたり数百両～千両の支出か
寛文２（1662）～寛文３（1663）における小作証文の宛名は「新田御中間衆中」
→生産性が安定せず、一括管理

②寛文４年（1664）から吉田勘兵衛宛の証文→耕地の分割が行われる
支出金額に対応した新田耕地の分割＝「地割」、生産力が一定度上昇したか

③開発に関与した人々
・砂村新左衛門→内川新田（横須賀市）・砂村新田（江東区）の開発者
→吉田新田＝野毛新田を含めて、東京湾西岸の海上交通に繋がる
・友野与右衛門→箱根用水の開鑿者

○吉田勘兵衛による吉田新田の開発は、砂村・吉田・友野グループによる東京湾・東海道沿いにおける開発の一環ともいえるか。

④分割した吉田新田の耕地を、吉田勘兵衛が購入していく
→延宝２年（1674）における検地によって確定された石高 1030 石余、面積 116 町余は全て吉田家の所有地、当時横浜市域最大の地主

５　おわりにー横浜新田・太田屋新田の開発との関係

①吉田新田の開発により、入海の約８割が陸地化された。

②吉田新田の成立により、大岡川の土砂の流出先は、延長された大岡川の河口と新設された中村川の河口へと移動。

③大岡川の河口は潮流が強く、土砂が堆積しない。一方、中村川の河口は土砂が堆積し浅瀬化が進行。新田開発の適地となる→横浜新田